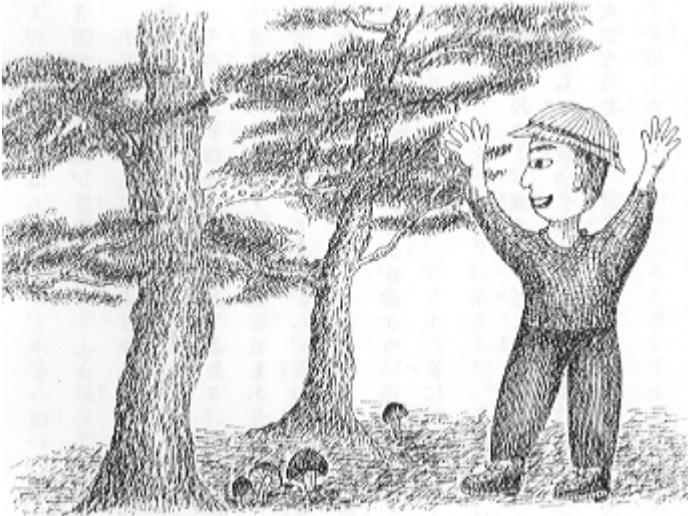


松茸山まつたけやまのにぎわい
(石生谷町)



秋あきになると、花子はなこのおじじは山やまへ上あがります。

背せなか中に色々いろいろうかついて上あがります。

一いち番最初ばんさいしに持もって行いくのは繩なわで、

「ここは、うら(私)が番ばん(見張みはり)り)をして

松茸山まつたけやまやさけ、用ようが無ないもん(人ひと)は入はいらんと

いて下ください。」

と言いうことを、みんなに知しらせるために繩なわ張はりを

します。

その次つぎに、七輪しちりん(こんろ)・なべ・酒さけ・砂糖さとう

・しょう油ゆ・ごぎなどなどを、何回なんかいも何回なんかいも往復おうふくして

持もち上あがります。

その合間あいまには、他ほかの山やまで番ばんをしていいる仲間なかまと一

緒しょに松茸狩まつたけがりの看板かんばんを立てたり、山やまに五色ごしきのリボ

ンを掛かけに歩あるき回まわったりもします。

花子はなこは、山やまの上うへで風ふうにたなびく五色ごしきのリボンを

見みるのが大だい好きすで、山やまのリボンはにぎやかに

しるし(前触まえふれ)やなとうれしくなります。

金木きんぎせいの花はなが咲さき松茸まつたけの最盛さいせき期きを迎むかえると、山

の下に大勢のお客を乗せた車が何台も止まります。

お客さんは、おじじの案内で山道を一列になつて山小屋を目がけて登り始めます。花子も列の一番後ろから登って行きます。

広場に着くと、お客さんは松茸狩りをします。

おじじと花子は、宴会の準備をします。

松林の中から時々、

「あつた あつた。」

「見つけたぞー。」

「あらあゝ いけえがー（大きいぞ）。」

と、いう声が聞こえてきました。

花子は何度も山に来ていたので、松茸は山の上から見るより、下から見上げた方が見つけやすいことを知っていました。そんなことを教えるとおじじの山の松茸がはよー（早く）のうなる（無くなる）ので、誰にも教えませんでした。

お客さんは、松茸狩りを充分に楽しんだ後、広場で酒を飲みながら松茸飯・焼松茸・松茸汁・松

茸入りすき焼などに舌鼓を打ち、松茸料理をおなか一ぱい味わいます。

宴会が長くなつて帰り道が暗くなると、松やにをつめたたいまつを明かりに山を下りました。下から見ると光がゆらゆらゆれて、まるできつねの嫁入り行列を見るようで、とてもきれいでした。

松茸山へお客さんが来る頃、おつあ（お父さん）やおつかあ（お母さん）は、田んぼで晩生の刈り取りに追われていて山へ来るお客を横目で見えていましたが、花子は山の上から聞こえてくる笑い声や手拍子・山にたなびく五色のリボン・暗くなつてからのたいまつ行列などが大好きで、松茸山が終わると、早く来年の秋が来ないかなあと心待ちにしていました。

現在石生谷町の松木は、ほとんど松喰い虫にやられて枯れ果て、松茸も普通の人には見つけられないで希少価値の食べ物になってしまいました。